

講演者:

シュテファン・グラープヘア
ドイツ連邦共和国大使館首席公使
2018年5月21日

於 金沢
全国日独協会連合会設立30周年記念事業
日独交流国際会議2018

講演タイトル:
持続可能な日独関係のために

木村敬三日独協会連合会長代行

西嶋石川日独協会会長

フォルカー・シュタンツェル日独協会連合会会長

ルプレヒト・フォン・ドラン日独協会連合会名誉会長

本日、皆様方のもとにお邪魔し、ここ金沢で開催される日独交流国際会議に参加できることをとても喜んでおります。今年は全国日独協会連合会設立30周年をお祝いする節目の年でありますから、私のこの喜びもひとしおであります。心よりお祝いを申し上げます。

<日本語>

「皆様、おはようございます。

たくさんの面白くて綺麗なところを訪問してきましたが、金沢は最も素晴らしい場所のひとつです。

石川県には来たことがあります。日本に来てから二年後に、私と妻は金沢に来ました。金沢滞在はとてもよかったです。今日は東京からまた金沢に戻れて幸せです。

今回もまた、金沢での滞在をきっと満喫できると思います。

本日は皆様にお目にかかれて、とても嬉しいです。皆様のお話にとっても興味を持っています。日独協会はとても重要です。このことについて、今日は皆様にお話しをしたいと思います。

ここから難しくなりますから、ドイツ語で続けたいと思います」

さて、手短かに歴史を遡ってみましょう。

30年前、つまり1988年の状況はどのようなものだったのでしょうか。金沢への旅行、ホテルの予約はオンラインではできなかったでしょう。子どもの教育は今よりはるかにやりやすかったです。なぜなら、学習の集中をそぐスマホやコンピュータゲームがなかったからです。私自身の当時を振り返ってみますと、1988年は、国家司法試験に合格し、歴史学での博士論文執筆に着手した年です。また同じ1988年には外務省にも応募しました。

外交官試験は難しいと同時に公正な内容でした。今でもよく覚えているのですが、口述試験では受験生全員が、ドイツ再統一についていかなる見解をもっているかと聞かれました。難しい質問です。1988年にはご存知のとおり、まだ鉄のカーテンも東西ドイツ国境もあったのです。外交官を目指す私たちは考えました。

私たちの出した答えは如才のないものでした。すなわち、ドイツ再統一達成のためあらゆる手を尽くすというのは、確かにドイツ基本法に掲げられた揺るぎない目標ではあるが、他方、現状と折り合いをつけつつ政治全体と国際情勢を見極めていかなければならないとしたのです。それが、当時すでに私たちが身につけていた現実的な見方だったのです。そして1988年当時の状況は実際再統一を予感させるものではありませんでした。

もしも1988年当時、ドイツ統一に関するこの質問への答えとして、次のような壮大な展望を語っていたとしましょう。すなわち、わずか1年後の1989年に東西ドイツの国境が開き、壁が崩壊し、ブランデンブルク門が通行可能となり、さらに1年経てばドイツの再統一が祝うことができるようになり、1991年にはソ連崩壊にいたると。そのような壮大な物語を語っていたとするならば、私はあの外

交官試験にきつと不合格になり、本日のこの30周年記念の場にお邪魔することもなかったでしょう。

1988年以降、つまりこの30年で、世界は大変な変化を経験しました。私たちが常識とする国際秩序はこれからも持続するのか、私たちはこんにち確信をもつことはできません。国連は果たしてどれほど強力なのか、EUの結束までもが脅かされるのではないかと懸念されます。中国は勢いよく台頭してきています。米国と現在の米国大統領については、その政策を最終的にどのように評価すべきか、またその政策によりどのような長期的な影響があるのか私たちは測りかねています。朝鮮半島で起きつつある変化は、緊張緩和と平和が実現するかもしれないと、慎重でありつつも前向きな期待を私たちに抱かせています。

技術の変化についても、スマホやコンピュータは生活の一部になっており、プライベートでも仕事でも、もはやそれらなしでは考えられません。それどころか技術の進歩はさらに加速しています。IoTや自動運転、人工知能等を考えれば明らかでしょう。コンピュータのプログラムは、チェスだけでなく、チェスよりもはるかに複雑な囲碁においても生身の人間の棋士を負かすようになってきました。皆さまの60周年記念において、アルゴリズムで起案された原稿をもとにロボット外交官が講演を行うというような事態にならないようにと祈るばかりです。

つまり、この30年に多くの変化が起きてきたわけで、こうした変化は今後ますます加速度的に進んでいくことでしょう。変化は地球規模で風を巻き起こしており、その風がプライベートでも仕事でも私たちをとらえているのです。地理的な線引きを行ったり、自分たちの置かれた地理的状況を頼みにしたりしても、もはや容易に身を守ることはできません。

私たちが、ヨーロッパの中心部に位置するというドイツの地理的条件に守ってもらえたり、美しいアルプスやシュヴァルツヴァルトの牧歌的安らぎに逃げ込めたりということはないのです。例えばこんにちのドイツにとり、地中海の対岸である北アフリカの社会的・政治的変化は、いままでになく大きな意味をもつようになってきました。どのみち皆様方は日本の気象条件から強い風にははるかに慣れておいででしょうが、この変化の地球的風はここ日本のような島国においても止まることはありません。

いずれにせよ私たちはみな、この新しい変化に対応していかなければならないのです。ですから、私たちはみな、自分の『シマ』を離れ、グローバル化の大海原に飛び込まなければならないのだと、ここに率直に申し上げたいと思います。

ドイツの世界地図を見ますと、世界の中心ないし中心線がグリニッジ子午線になっているというのが未だに私たちの世界の見方であることがわかります。ヨーロッパもドイツもその中心にあるのです。しかしながら、政治と経済の重心はここ最近の数十年で大きく移動してきました。中心にマラッカ海峡が描かれている地図のほうが、こんにちの世界における政治力と経済力の分布を恐らくよりよく反映していると言えるでしょう。

このような認識は政治情勢についての我が国の理解と行動にも著しい影響を与えています。それゆえドイツ外務省においても、アジア政策の位置づけは最近一層高まりました。この地域専門の「アジア太平洋局」が設置されたのです。これは戦略レベルでも、個別具体的なプロジェクトレベルでも、対アジア政策・対アジア協力を強化していこうという趣旨です。日本を主な担当とする課も設置されました。

世界が、これほどまでの変化を示し、激しい政治的・経済的ダイナミズムをもって変化を続けていくのだとしたら、また、そのような世界で、先ほど私が訴えたように、敢えてグローバル化の海に飛び込んでいかなければならないのだとしたら、これまでも増して重要になってくることがあります。

すなわち、この激動の時代においてこそこれまでも増して、信頼しあうことのできるパートナー、お互いに支えあうことのできるパートナーが必要だということです。まさにドイツと日本は、変化する時代にあっても、お互いに信頼しあい頼りにしあえるパートナーなのです。

それでは、この日独のパートナーシップの本質とはどのようなものなのでしょうか？

私たちは共通の価値を共有しています。民主主義、多国間協調主義、自由貿易は私たちの政治方針を支える中心的な価値となっています。互いにこうした共通の価

値を確認しつつ、「法の支配」等の原則維持にむけ明確な方向性をもって進むことは極めて重要です。とはいえ共通の価値を単に防御の手段、まして封じ込めの手段であると考えようようなことがあってはなりません。

ドイツと日本が共有する価値は、革新的な戦略を生み、こうした価値に基づく第三国との協力を可能にします。

例えばドイツと日本は、インドとブラジルと協力し、国連安全保障理事会の改革を目指しています。あるいは多国間の自由貿易体制を例にとってみましょう。欧州連合と日本の経済連携協定（EPA）は、7月に署名され、2019年には発効する見込みです。この日EU・EPAによって、双方の貿易のさらなる強化にむけた多くの経済的なチャンスがもたらされるだけではありません。EPAならびにEPAと同時合意された戦略的パートナーシップ協定（SPA）により、私たちの関係は政治分野、社会分野でも強化されるとともに、共通の創造的取組をより幅広く進めていく機運も高まるでしょう。

この日EU・EPAでは、いわゆる第三国市場ビジネス協力を定めた部分も重要です。すなわち、第三国市場におけるドイツ・EUと日本との協力は、つまり、EPAでは二国間、日・EU間の貿易のみの強化を図っていくわけではなく、ドイツ企業・欧州企業と日本企業の世界各地における協力強化も目指されているのです。これにより、中国や同国の巨大プロジェクト「一帯一路」構想において協力可能な分野をさぐる展望も生まれてきます。

価値の共有ということでは、当然のことながら文化も極めて重要な役割を担っています。とりわけ今年については、このことが当てはまります。ですから日本語で次のように申し上げさせていただきます。

<日本語>

「ドイツと日本の関係にとって、今年はとても大切な年です。今年が「第九」の年です。ベートーベンの「第九」が日本で初めて演奏されて100年目の年なのです」

また、文化ということですので、日本の是枝監督の映画「万引き家族」によるつい先日のカンヌ国際映画祭パルムドール受賞についてもここで一言触れ、お祝いを申し上げたいと思います。受賞は、日本映画の強さを示すものです。この作品で扱われている社会的な問題のなかには、あるいは日独協会でも議論できるようなテーマもあるかもしれません。

さらに未来に目をむけてみましょう。2020年には、東京でオリンピック・パラリンピックが開催されます。これは、東京・ベルリン間における姉妹都市どうしの文化交流拡大にとどまらず、ほかのさまざまな県や地域へも広がりが期待できます。

すなわち、日本の素晴らしいイニシアティブで、世界各国のオリンピック選手団の合宿受け入れや応援のため、希望自治体を「ホストタウン」に指定しようという取組があるのですが、ドイツはこの取組を最初から積極的に応援しています。そして、ドイツ大使館と総領事館だけでなく、何よりも日独協会の皆様も支援してくださっています。オリンピックを本来あるべき姿にするために、つまり、選手たちが最高レベルの成績を競う国際スポーツ大会であるだけでなく、出会いの場、国際交流と平和の祭典とするために、様々な分野において協力してくださっています。全てのオリンピック参加国の中で現状一番多くホストタウン登録がされているのはドイツで、17の自治体が決まっています。

ドイツと日本は良きパートナーとして、これからも変化と改革をもたらすため積極的連携を行なっていきます。政治レベルの関係や国際場裡において協力を進めていきます。

例えば、ドイツと日本はG7やG20のメンバーですし、来年日本はG20の議長国を務めます。また、2016年11月のガウク大統領、今年2月のシュタインマイヤー大統領という具合に、比較的短い期間の間に2人の連邦大統領が日本を訪問しました。日独の現在の外務大臣も、すでに電話会談を行っていますし、直接会談も行っています。またこの夏にもドイツの外務大臣が訪日する見込みです。

このように、政治レベルでは緊密な交流が行われているのです。しかし、こうした要人級の外交だけが重要なわけではありません。何をおいても、市民レベルの絆こそが重要なのです。

そしてまさにこの市民レベル交流において、日本各地の日独協会、ドイツ各地の独日協会の皆様が非常に重要かつ持続的な役割を担ってくださっています。日独協会・独日協会では実に多様なテーマを取り上げ、議論することが可能ですし、若い人々にそれぞれドイツや日本について知りたい、知見を深めたいと思ってもらうための存在です。なかには、若者とより上の世代が一緒になって、ドイツや日本に親しみをもち、夢中になれるような素晴らしい取組があります。

日独協会・独日協会は経験を共有しあい語り合う場です。ドイツと日本それぞれについて、各人の長年の知識や経験談を語り合い、伝え合う場なのです。たとえ、技術の進歩が、私たちの生活に多くのメリットや変化をもたらしても、日独協会・独日協会におけるこのような出会いは、かけがえのない価値をもち続け、日独関係に汲めども尽きぬ力をもたらす源であり続けます。また、日独協会・独日協会が連帯の力を発揮する団体であることも、2011年の東日本大震災で私たちは目の当たりにしました。これは極めて重要なことであり、私たちに信念と希望を与えてくれます。

私たちは日独協会・独日協会の活動とその極めて多大な熱意を非常に高く評価しています。大使館も大阪総領事館も、必要があればいつでも日独協会のご相談にのり、ご支援をさせていただこうと思っております。ですから、日独協会連合会設立30周年記念というこの歴史的な日に、皆様のもとにお邪魔させていただきただけでしたことは、大変大きな喜びです。

<日本語>

「日独協会はとても重要です。
設立30周年おめでとうございます！今後も頑張ってください！
日独交流に私たちの未来はかかっています。一緒に未来をつくりましょう。」

ご静聴有り難うございました

<日本語>

「ありがとうございます！」